ひらつからいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒151-0051
東京都渋谷区
千駄ケ谷
4-11-9-303
TEL・FAX
03-3401-6383

迎春

「らいてうの家」への想い

名誉館長　羽田　澄子

思い返せば「らいてうの家」がオープンしたのは2006年の5月28日。この日、完成した「らいてうの家」をはじめて見た私は、いわゆる記念館といった雰囲気とはまったく違う「家」のたたずまいに感動したのでした。家全体が〝らいてう〟のような雰囲気を表現しているし、地元の木を生かしたすばらしい木造建築なのです。丸窓の部屋にこだわって、映画を作った私は丸窓の部屋があればいいが、と思っていたらそれも違和感なく作られています。「よかった、すばらしい」とすっかり嬉しくなりました。

映画「平塚らいてうの生涯」の製作中に「らいてうの会」会長の小林登美枝さんは私に「映画ができたら、〝今度はらいてうの家〟をぜひ作りたいのよ」といわれていました。でもそこはらいてうが購入していた土地だけれど、らいてうは訪れたことがないという話を聞いて、私はいわゆる記念館ではないけれど、訪れたくなるキャラクターを持った家を考えなければ……と思ったのでした。小林さんは完成した映画を喜んでくださったのですが、「らいてうの家」を気にされつつ他界されてしまわれました。

私は「らいてうの家」について意見を聞かれると、「いわゆる記念館ではなく、らいてうを想い、私たちが学び運動をする拠点として使えるような家ができたら……」といっていたのですが、実は「家」の事業を小林さんから引き継がれた米田佐代子さんはじめ、関係したすべての人が「いわゆる記念館ではない家」を想っておられたのでした。そして「家」の建設に実際に関わられた多くの方たちの思いも同じで、それがみごとに「家」に表現されたのです。

館長の米田佐代子さん、そして地元の方たちの活動は目を見張るすばらしさです。その活動は……「らいてうの家」に対して私がなんとなくイメージしていた、言うは易く実現は難しいと思っていたあり方が、本当に具現化されているのです。

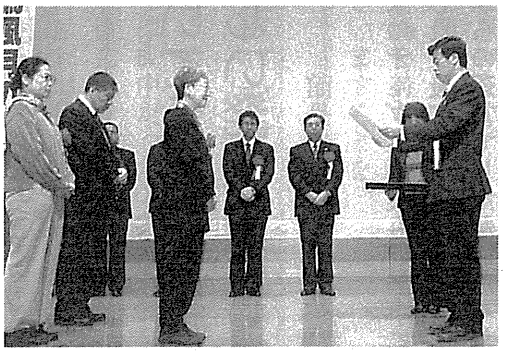
「家」が開館しているのは土日月、雪の多いあずまや高原なので、冬は閉じてしまうこの「家」に、開館して2年で5000人以上の人が訪れています。「らいてうの家」という言葉に、私はなんともいえない魅力を感じるのですが、おそらく誰もが同じように感じるのではないでしょうか。訪れると、いわゆる記念館ではなく、らいてうの雰囲気を体験し、自分の中になにかをやろうという想いが生まれる。

「らいてうの家」はそういう家なのです。

「上田市都市景観賞」を受賞！

「県産の木で建てた家」「自然の風景に溶け込んだ家」と好評のらいてうの家が、このほど平成19年度上田市都市景観賞を受賞いたしました。この賞は上田市内の「優れた景観形成に寄与する建築物や活動」に与えられる賞として平成4年度から10回開催されてきましたが、今回は合併後新上田市が対象になり、旧真田町からはじめて選ばれたものです。

11月17日の表彰式では、設計にあたった「アトリエ獏女性九人衆」のみなさんと建築担当の宮下組も表彰され、真田・上田らいてうの会も出席してともに喜びあいました。



母袋上田市長から表彰される米田会長、
アトリエ獏・服部さん、宮下組・山本さん

「らいてうの家」を訪れて

奥村　雅史

私はらいてうの孫に当たります。父も母も「らいてうの家」が出来て一年以上にもなるのに、未だに訪れることが出来ないでいることを心苦しく思っておりました。父は九十歳になり、車の運転も難しく、私の運転でようやく十月に訪れることができました。

正直に申しまして、私は「らいてうの家」を作るということに、少し抵抗感がありました。祖母に関する書物などに目を通しましても、実際の祖母とはかけ離れた姿が多いように感じられます。様々な人たちの思い込みの中で、らいてうというイメージが一人歩きしていくように思えるのです。私にとっての祖母は、いつもきちんと着物姿で正座して、本を読んでいるか原稿を書いている、そんな人です。うっかり部屋に入れば、幼少の私も座禅につき合わされる。こっそり抜け出すのが大変でした。祖父が亡くなってからは、一人で一升瓶を傍らにドンと置いて、ひじきの煮物といんげんの胡麻和えを肴に少量の酒を楽しむ。一人暮らしを苦にもせず、いつもニコニコ穏やかな人でした。そんなもともと人前に出ることが苦手だった祖母が、記念館のようなものの出来ることを、果たして喜ぶだろうかと、つい考えてしまうのです。

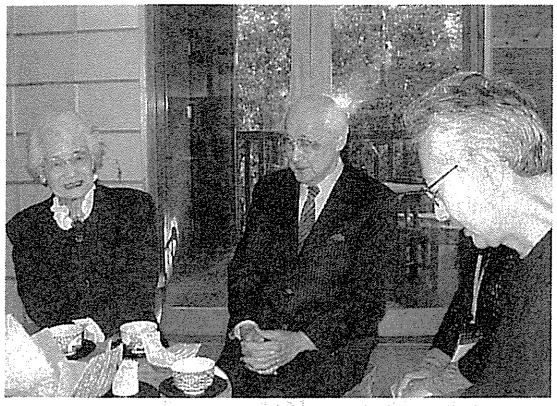
しかし今回真田を訪れて、地元の木々をふんだんに使った建物、斬新な家具、輝くステンドグラスやペレットのストーブ等々に触れることが出来ました。そしてスタッフの方々のお話を伺う中で、すっかり印象が変わりました。

ここは、いわゆる「記念館」ではなかったのですね。「らいてうの家」は、単なる家ではなくて、それに関わる人々のエネルギッシュな動きそのものだったのですね。

恥ずかしい話ですが今になって、どんなに多くの方々、そして地元の人々が、日々「らいてうの家」を作り出しているのかを知りました。「私にとっての祖母」などにこだわっていたのは自分のほうでした。十人の人があれば十通りの捉え方があってよかったのです。そして今なお、祖母の生き方のなにかが、多くの人々に影響を与え、エネルギーを生み出しているということに、改めて気付かされた次第です。

父も母も今回の訪問を喜んでおりました。

「平塚らいてうの会」のみなさまのご尽力と、また、それを日々支えておられるみなさまに、心より御礼申し上げます。



ホールでくつろぐ、右から筆者の雅史さん（三男）とらいてうのご子息奥村敦史さん、綾子さんご夫妻。「母がここにいたら、どんなに喜んだことでしょう」と感想をのべられた綾子夫人

今、らいてうを語り継ぐ
新しい発展めざして

館長　米田　佐代子

らいてうの家のオープン事業も、無事に2年目を終了しました。最初の1年は無我夢中、今年度も走りながらの運営でしたが、たくさんの収穫がありました。

今年度も2千人を越える方々が「家」を訪問してくださいました。遠く北海道からも見え、また金沢から台風で道路が途絶したなかをバスで来てくださったグループや、女性団体や自治体の男女共同参画行政関係団体の研修など「学習型」もふえました。夏には菅平や峰の原のペンションで送迎してくださるところもあって賑わいました。

また、7月にはオープン一周年記念事業として上田で辻井喬さんの講演会を開催、このほか岸田衿子さんや加藤治子さん、小沼通二さんのほか、フルートの大和田葉子さんやサクソフォンの中川美保さん、コカリナの黒坂黒太郎さんなど、著名なアーティストの方々も見え、ボランテイアでご出演くださるという幸運に恵まれました。

森のめぐみ講座

笹刈りときのこ探し きのこ鍋に舌つづみ

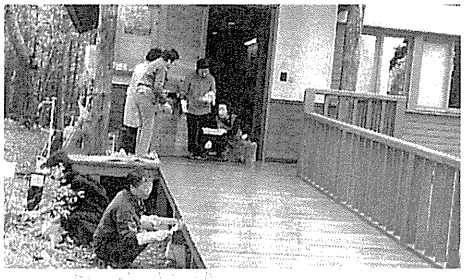
秋の森のめぐみ講座は10月14日（日）、さわやかな好天のもと、午前中にらいてうの森の笹刈り、午後はきのこ探しウォーキングと体を動かして学ぶ講座となりました。笹刈りは、林業士の熊崎さんの事前指導の下、真田のシルバーの方々の手馴れた作業援助を受けて、予定よりぐんと広い範囲の笹刈りをあっという間に終えることができました。その作業のさなかに、つやつやしたきのこを発見、さっそくお昼のきのこ鍋の中に。

薬草園で、真田、上田の会員の方々の手作りのきのこ鍋とおにぎり、漬物、煮物などを美味しく味わってから、峰の原高原の須坂青年の家に移動して、きのこ探しウォーキング。30人の参加者の中から、リーダーの方を中心に5～6人のグループできのこ探しをしました。今年は、きのこの少ない年でしたが、リーダーの方たちのおかげで、いろいろのきのこを採ることができました。きのこを探しながら色づき始めた高原の森を歩く爽やかさに、「やみつきになりそう」の声も。

2月にはトレッキングの企画＝2月11、12日には、「森と私たちのいのちを考える講座」と「スノーシューで森のいのちを訪ねる」トレッキングを企画しています。雪の森は独特の魅力を見せてくれます。ゆるやかなコースも用意してみなさんの参加をお待ちしています。

（三留弥生）

閉館に備えて大掃除をしました にぎやかに一年間の反省会も



玄関前のスロープのペンキ塗りや、中の床のワックスかけに大奮闘のみなさん

真田・上田のみなさんと東京の理事が現地で反省会。

辻井講演会に上田市が「新生上田市一周年記念」の一環として援助してくださったことも新しい特徴です。11月には自然に溶け込んだ建物として上田市の「都市景観賞」を受賞、「家」が上田地域に根を下ろした年でもありました。

さらに大きな成果は、らいてう自伝の協力者であった小林登美枝さんの遺された資料や、ご遺族から提供された資料などを通じて、これまでの「平塚らいてう」像をさらに深める可能性が発見されはじめたことです。生涯のパートナーであった奥村博史についても、中国で描いた「魯迅臨終の図」が日中友好の懸け橋として評価されていることも分かり、そのことによってまたらいてうの生涯を見直すきっかけも出てきました（4面参照）。特に戦後らいてうの「平和＝軍備を持たない憲法」への強い思いがどこから出てきたか、今こそ語り継ぐテーマとして課題にしたいと思います。

今年は東京や関西圏でも、らいてうのこころざしを語り合う場を持ちたいものです。どうかお力添えくださいますことを。

［寄付者銘板］完成！

三千人におよぶ「家」の建設募金寄付者のお名前を掲出したいと作成中だった「寄付者銘板」が完成、ベランダの壁に取り付けました。来年春のオープニング時には、お目にかけることができます。デザインも費用も、上田市内の業者が全面的に協力してくださいました。

シリーズ

らいてう再発見

奥村博史『魯迅臨終の図』

らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第4巻（戦後編）に、興味深い一節があります。1956年、中国の有名な文学者であった魯迅。その夫人許広平さんが原水爆禁止世界大会参加のため来日したとき、羽田空港に出迎えに行ったのはパートナーの奥村博史だったというのです。

それは、1936年に魯迅が上海で亡くなった日に上海にいた奥村博史が、魯迅をかくまったことで知られる内山書店を訪ねてそのことを知りすぐに弔問、そのときのスケッチをもとに「魯迅臨終の図」を油彩で描きあげ、許広平さんに贈った縁からでした。許さんはらいてうのことは知っていましたが、奥村博史と「ご夫婦」であることをはじめて知り、感激したそうです。

最近、自伝にもつかわれた当時のらいてうのメモが見つかりましたが、それによると許広平さんは、らいてうの病気見舞いとともに博史への謝意のためらいてうの自宅を訪問した、と書かれています。そして、2006年に中国で出版された『魯迅と日本の友人』という本の中で、この絵が写真入りで紹介されていることも分かりました。

奥村博史と内山完造の親交を知る内山嘉吉さん（内山書店前社長）は、奥村の没後らいてうによって出版された『わたくしの指輪』のなかで、奥村を「日中友好のかけはし」と語っています。

絵は、上海の魯迅記念館に保存されているそうです。らいてうも実物を見ることはなかったその絵を、いつか見に行きませんか？。

（米田佐代子）

2008年らいてう講座
今を生きるあなたに……
「らいてうの思想と現代」

第1回　2月14日（木）PM6時30分～8時30分
テーマ　らいてうがめざした「人間らしさ」というジェンダーバックラッシュがねらうもの
講　師　折井美耶子（女性史研究者）
　　高橋　和枝（新日本婦人の会副会長）
　　司会　木村　康子（日本母親大会代表委員）

第2回　3月14日（金）PM6時30分～8時30分
テーマ　「ただ戦争だけが敵なのです」―らいてうが「9条」に寄せた世界平和への希望
講　師　米田佐代子（らいてうの会会長・らいてうの家館長）
　　ゲスト　藤谷　秀（山梨県立大学教授）
　　会　場　2回とも全国教育文化会館（エデュカス東京）地下会議室

〈事務局日誌〉

10月4日　第3回理事会開催
10月13日　奥村敦史さんご夫妻「らいてうの家」に来館
10月14日　第4回森のめぐみ講座「菅平・あずまや高原のきのこを楽しむ」
10月29～30日　「らいてうの家」大掃除
10月30日　「らいてうの家」運営反省会
11月1日　記録映画を上映する会理事会に出席
11月6日　「らいてうの家」閉館
11月11～12日「らいてうの家」展示品収納作業
11月14日　事務局会議
11月15日　記録映画を上映する会主催のお話と映画の集い「にがい涙の大地から」開催
11月16日　「らいてうの家」水抜き・展示品搬送
11月16日　第4回常任理事会
11月17日　「上田市都市景観賞」表彰式に米田館長ほか出席
12月5日　東京らいてう講座・企画打ち合わせ
12月26～27日　新年号ニュース発送作業

〈お願い〉

会費未納の方は、ご送金くださるようお願いいたします。